



Title	マールブルグ病について
Author(s)	広済, 幸雄
Citation	makoto. 1977, 19, p. 3-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86179
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マールブルグ病について

大阪府衛生部環境保健課長

広 濟 幸 男

最近地球上の一風土病として存在していた、ウィルス性疾患が国際的な関心をよぶようになった、その一つにマールブルグ病といわれるものがある。今回はその概要を御紹介申上げたい。

去る5月下旬厚生省主催のブロック会議で、マールブルグ病について、中央アフリカの今回の流行は終息したとコメントがあった。即ち「スタン、ザイルでは一九七六年七月に、マールブルグ病が流行した。最初ラッサ熱ではないかといわれているが、マールブルグ病であった。スーダン国境では八〇人が発生し、四六人死亡した。十月になり患者は、一三六人となり六二人が死亡した。一方ザイルでは、二五六人発生し五九人が死亡した。血清を英国で検査したところ抗原的には、マールブルグと、少々異なるが結果的には、マールブルグと決定された。この流行には、日本人は、ま

き込まれなかったが、西ドイツはまき込まれた。英国では、エマリー研究所の検査員が、血清取扱中に感染した。」というものである。近年、航空機の発達、国際交流の増大、海外旅行ブームなどの影響により、アフリカ奥地の風土病が常に本邦をおびやすくなった。去る五年三月のラッサ熱患者接触者の帰国により伝染病予防法の指定伝染病にラッサ熱が加えられた例がこれを物語っている。さて先にもどってラッサ熱につづいて今話題になっているマールブルグ病とは、どんな病気であろうか？一九六七年に西ドイツのマールブルグ (Marburg) において偶然の事件から、その存在が知られるようになった。即ちアルボウィルス研究者がミドリザル (ペルベットモンキー) の内臓を扱っているとき、三〇名の発病者がでてあらゆる手当を行つたが効果がなく、奇病と呼

ばれる状態で七名が死亡した。次いでユーゴスラビアにおいても、医学者が、西ドイツと同様な条件で罹患、同様の症状で死亡した。又一九七五年には、アフリカ横断旅行のオーストラリア夫婦がヨハネスブルグで発病している。病原体はウィルスで本来はサル病気である、アフリカ中央部において、人が森林地帯に出入してミドリザルに接触して感染すると考えられているが、サルから人への通常の感染ルートは不明である。(即ち創傷によるものか呼吸器から感染するものか、又は昆虫などの媒介によるものかは未だ不明である) 人がかかった場合の症状は嘔吐、高熱、筋痛、結膜炎、黄疸、内出血、重度の衰弱、全身の発疹があり昏睡状態になる。抗生物質を含め医薬品は無効であるが、本症の回復者の血清は有効であるとされている。

なお致死率は、30〜40%である。病理解剖所見では、皮膚出血、肝臓壊死、肺炎、脾腫が見られる、又、サルの場合、実験例では、人の症状に似ているが自然界の例は不明である。先にもどって今回の中央アフリカの流行は、スーダンの最南部マリジ州の近くのナザラ村で一九七六年七月に農夫が歩行中突然高熱を発し、たおれたので手当の為入院したが、二日後に死亡した。遺体引取りの為、兄弟二人が来院したが、丁度発病の時期であつたのか、病院でたおれ、その二人も死亡した。以後数週間の間に四五名が死亡し、この内には、病院の医師一人看護婦八人、警備員二人が含まれていた。スーダン政府はマリジ州を検疫封鎖して連絡はラジオのみとしたが、酷暑の森林地帯を国境とした、ザイルの北東部のグリーンバ州のヤンブク村では、二五〇人以上の人が本症で死亡した。隣国ウガンダ、ケニヤは、国境を閉鎖しベルギー国営のサベナ航空は、空路を閉鎖した。ベルギー医療協力隊、フランス協力隊のDr. ルベルDr. キルベン、ラクアエル等は、死者や患者から、血液を採取し、ベルギーアトレトワング研究所、米国アトランタのCDC、英国

のソールズベリー大学、フランスのパスツール研究所に検体を送つたが、その結果一九七六年十月ジュネーブのWHOは、ウィルスは、ラッサウィルスではなく、アポ群の内マールブルグウィルスと発表した。一九六九年東アフリカナイジェリアのラサの教会病院の六九才の伝導看護婦の発病で表面に出たラッサ熱に始まった開発途上国の地方病が、昨年の我国での指定伝染病となり、今回は、接触者が本邦人になつたので、マールブルグ病は指定にはならなかつた本症以外にもBウィルス症等のまだ本態の不明な恐ろしい感染症が数多く地球上には、存在するので、人と病原微生物との関いは、まだまだ続くものと思われる。

お知らせ

当協会事業部では次のとおり血清(治療剤)を常備しております。

○ガセスン抗毒素(国有ワクチン 皮下品)

○乾燥破傷風抗毒素
○乾燥まむし抗毒素
保管場所

東大阪市中小阪三一八一ー一

防疫資料部

電話(06)七二四一〇五三三(代)